

教科教育学の実践的展開

鈴木 明子（人間生活教育学講座）
草原 和博（社会認識教育学講座）
檜葉 みつ子（英語教育学講座）
大坂 遊（博士課程後期大学院生）
河原 洗亮（博士課程前期大学院生）
守谷 富士彦（博士課程前期大学院生）

要約

本稿では、教科教育学の専門性に基づいた「リサーチ力」、すなわち教科の特性や目的を学問的・政策的背景から考察し、その成果を活かして授業のあり方を提起できる知識・能力を育成することを目的とした「教科教育学の実践的展開」の成果を論じた。

I 共通選択科目の理念と構成

本科目の目的は、「教育現場における現代的・実践的な課題に対し、それを解決するための研究方法を理解することができる」である。いうなれば前期の必修共通科目「教科教育学研究方法論」を受けて、そこでの学修内容を実践的な次元に置換し、教科のあり方や教科研究のあり方を議論できることをねらいとしている。

授業は、大きく3部構成で構成し、全教科の合同授業と教別別の個別授業との往還で進めた。授業のテーマを端的に述べると、「各教科らしさとは何か」である。今年度は、目標に記載された「教育現場における現代的・実践的な課題」を、教育政策の動向を踏まえて、教科の「見方・考え方」をはたらかせた授業デザインと受けとめた。15回の講義では、この意味での授業をいかにデザインするかを軸に、3回の連続シンポジウムを企画した。

第1部（第1回～第3回）の「導入シンポジウム」では、各教科の担当教員がそれぞれの専門的知見を基盤に「各教科の存在理由」についてプレゼンテーションを行った。受講者は、自分の専門外の教科の存在理由を疑いつつ（例えば、音楽科教育を専門とする院生が社会科教育の存在価値に疑問を呈するなど）、対話を深めた。第2部（第4回～第8回）の「中間シンポジウム」では、受講生が各教科の固有性を支える「見方・考え方」について文献調査を行い、その成果を報告した。担当教員が示した各教科の理念とその差異・接点を、受講生の発表を通して具体化するとともに、教科理論の概念化に努めた。第3部（第9回～第15回）の「最終シンポジウム」では、「アサガオ」と「エネルギー」を題材に、受講生が各教科の「見方・考え方」をはたらかせた授業を提案した。例えば、同じ「アサガオ」でも、色や形のデザインとして捉える美術科と、江戸時代の商品作物として捉える社会科では、対象に対する認識論が異なることが顕わとなった。また同じ「エネルギー」であっても、環境問題の評論文の構造に着目する国語科と、生活と電気量消費の関係に着目する理科、音のリズムや曲想に着目する音楽科では、教科目標が異なることが明らかと

なった。一連の議論を通して、教育課程における各教科の位置づけとカリキュラムマネジメントの重要性が理解された。(草原和博, 鈴木明子, 檜葉みつ子)

Ⅱ 共通選択科目の実際

1. 第1部「導入シンポジウム」編

合同オリエンテーションでは、前期の授業の振り返りと本授業を実施する目的・意義について確認した上で、当授業に期待することを学生が議論した。導入シンポジウムでは、参加する全10教科の教員が2回に分けて自身の教科の意義・固有性をプレゼンテーションした上で、他教科の学生による情報共有や討議を行った。

	日時	担当教科
第1講	2016年10月5日	オリエンテーション
第2講	2016年10月12日	理科・技術科・英語科・家庭科・美術科
第3講	2016年10月19日	数学科・国語科・社会科・体育科・音楽科

(1) オリエンテーション・導入シンポジウムのテーマ

1. 前期「研究方法論」で得たことを振り返る／当授業に望むことは何か？
2. 学校教育全体の中で〇〇科教育の目指すものは何か？
3. 社会の中で〇〇科教育の必要をいかに説明するか？

(2) 講義の流れ

第1講の合同オリエンテーションでは、担当教員が前期の授業の振り返りと本授業のガイダンスを行った上で、当授業に期待することをまとめた。

第2講・第3講の導入シンポジウムでは、授業の導入部で授業担当教員が導入シンポジウムでの発表テーマを確認し、展開部で各教科の教員がテーマについて10分程度で発表を行った。それを受けて、教科別小グループに分かれて中間シンポジウムに向けて他教科との違いを意識するという観点から議論を行ったり(第2講)、あえて各教科の視点から他教科の存在意義を問いなおしたりする視点から討議が行われた(第3講)。

(3) 具体的な講義内容

① 第1講：合同オリエンテーション

導入部で授業担当者の鈴木が、前期に実施した「教科教育学研究方法論」の概要と提出させたレポートを活用して振り返りを行い、近年の教育政策の要請に対応する形で「これからの教科教育で育成すべき資質・能力とは」「教科の本質的意義とは」「教科の特性や目的を学問的にとらえる意義」といった観点から、本授業を実施する目的・意義について確認した。

導入部では作業プリントを活用して、まず個人による前期の授業で得た学びの振り返りをした上で、教科をシャッフルした少人数グループに分かれて振り返りを共有し、代表者による意見発表が行われた(写真1)。発表では、「他教科の目的・意義を知ること自分

の教科との連携を考えることができるようになった」などの教科間連携の意義を再認識したという意見が複数挙げられた。

終結部では、議論をふまえて個々人が「当授業に望むこと」をプリントに記入・提出した。

② 第2講：導入シンポジウム

教科	発表テーマ（カッコ内は筆者による補足）
理科	「学校教育全体の中で理科の目指すもの」（理科教育の現状と課題，理科の見方・考え方，理科において育成を目指す資質・能力の整理）
技術科	「深い学びを導く，深い問い：教育実践の研究のために，情報や技術のスキルや考え方がどのように生きるのか？」
英語科	「学校教育に英語科が貢献できること：外国語科の目標，外国語科における見方・考え方」
家庭科	「学校教育全体の中で家庭科教育の目指すもの」（家庭科の成立背景と教科観の変遷，家政学の観点から見た家庭科で育成すべき資質・能力）
美術科	「学校教育全体の中で美術科教育の目指すもの」（美術科における「知識」「技能」「見方・考え方」概念，美術科のイメージ）

各教科の発表後，教科ごとのグループに分かれて「発表を聞いて考えた自分の教科の特性」について議論し，中間シンポジウムでの発表に備えた。その後，次週までに準備しておく課題として「なぜ〇〇科という教科があるのですかと問われたらどう答えるか」が提示された。

③ 第3講：導入シンポジウム

教科	発表テーマ（カッコ内は筆者による補足）
数学科	「なぜ，数学科があるのか？への回答」（道具としての数学のよい使い方を教えるため）
国語科	「なぜ国語科があるか」（ことばによって認識し，通じ合い，文化を創造するとともに，生活や社会を改善する力を身につけるため）
社会科	「なぜ社会科という教科があるのか」（民主主義の価値や生き方を教えるため，民主主義の状況や課題を教えるため）
体育科	「なぜ『保健体育』という教科があるのだろうか？～『体育』に着目して～」（体格・体力・運動能力の形成，人格の形成，脳機能の向上のため）
音楽科	「社会の中で音楽科教育の必要性をいかに説明するか」（音楽を通じた非言語的コミュニケーション，異文化理解，自己表現，他者との協働のため）

導入で，担当教員の草原より「教科教育にとって真正な学びとは何か」というガイダンスがなされた。各教科の担当教員の発表（写真2）の後，「〇〇科教育は本当に必要なのか？」という批判的な観点から意見交換を行い，発表した教員に対して「反論」がなされた。各教科からは，「現在の社会を前提としているが，50年後も必要なのか？」「コンピテンシーベースとなった場合に教科の必要性をどう主張するか？」といった意見が出された。



写真1 学生による発表

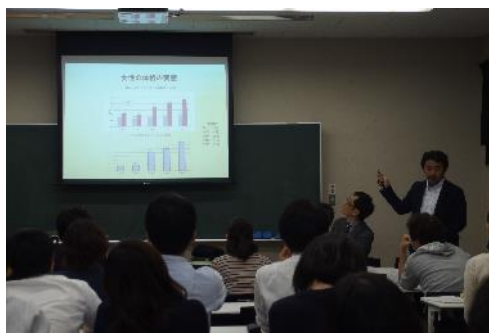


写真2 各教科担当教員による発表
(大坂 遊)

2. 第2部「中間シンポジウム」編

導入シンポジウムでは、「学校教育全体の中で〇〇科教育の目指すもの」や「社会の中で〇〇科教育の必要をいかに説明するか」を各教科の担当教員が発表した。それらを踏まえ教科別で資料選定とその分析・解釈、プレゼン資料作成を行い、中間シンポジウムでは、各教科の目的の固有性と普遍性についての理論・文献研究の成果を発表した。

	日時	担当教科
第7講	2016年11月16日	数学科, 英語科, 美術科, 理科
第8講	2016年11月30日	社会科, 家庭科, 音楽家, 国語科

第4講～第6講は教科別の個別授業。中間シンポジウムでの発表に向けて準備を行った。

(1) 中間シンポジウムの発表テーマ

「〇〇科の見方・考え方」とは何か？

(2) 講義の流れ

中間シンポジウムでは、まず各教科が10分程度で発表を行った。(写真3) また各教科の発表終了ごとに、他教科からの質疑応答を行った。最後に、複数教科によって構成されたグループごとに意見交換が30分程度行い(写真4), その成果を共有した。第8講では、時間の都合により意見交換は行わなかった。

(3) 具体的な講義内容

① 第7講：中間シンポジウム

教科	授業テーマ
数学科	「定義の設定」「証明」「問いの発生」を行う際に用いられる見方・考え方
英語科	言語を「適切な言語使用」「文化理解」「読み手・聞き手の思いや感情」として捉える
美術科	・視覚リテラシー ・自分や他者が感じた、考えたことに価値を見出し、受容する意識
理科	自然の事物・現象を、量的・質的な関係や時間的・空間的な関係などの科学的な視点で捉え、比較したり、関係付けたりするなどの科学的に探究する方法をもちいて考えること

【各教科の発表の終了ごとに質疑応答】

- ・(数学科に対して)「その見方・考え方が数学独自といえる理由は？」
- ・(英語科に対して)「言語が変われば考え方も変化するのか？」
- ・(美術科に対して)「現場はそうしているのか？」
- ・(理科に対して)「数学科と理科の決定的違いは？」

【意見交換】

- ・数学科と理科，音楽科と美術科，国語科と英語科，社会科，家庭科という5グループで意見交換(写真3)
- ・(国・英)「言語教育としての共通性がある。その中で“国語科ならではの，英語科ならではの”でやるのか。それとも“国語科でも英語科でもやる”とするのか。」
- ・(数・理)「学問の数学と理科の違いは分かったが，学校教育と考えた時の違いはわからなかった。」
- ・(音・美)「美術科の創造力は音楽科にない。音楽科は楽譜などから自己表現する，一方で美術科は創り上げていることが多い」

② 第8講：中間シンポジウム

教科	授業テーマ
社会科	社会を考察し，社会を構想するための視点や方法
家庭科	①総合性(生活の要素を総合的に捉えて，課題を解決する)，②実践性(日常生活での実践につながる価値や態度を育成する)，③自己の生活の創発(他者や環境との相互作用から生活をよりよくする)
音楽科	感性を働かせ「①音楽的な活動を通して自分自身や，他者との関わりを創造すること」「②音や音楽を，音楽を形づくっている要素とその動きの視点で捉え」自己のイメージや感情，生活や社会，伝統や文化などと関連付けること
国語科	「ことば」と自分の「関係性を問い直して意味付ける」

【質疑応答】

- ・(社会科に対して)「社会科授業で一般的には社会認識なのか？社会形成なのか？」
- ・(国語科に対して)「もし言葉を媒介にミロ・ビーナスをみると，国語と英語の違いはどうなるのか？(日本語か英語かの違いなのでは?)」
- ・(家庭科に対して)「ミニマム・エッセンシャルズの人たちにどう説得するか？」
- ・(音楽科に対して)「感性と知性を融合させた先にあるものはなにか？それは音楽でないといけないのか？感性は学校で教える・養うことはできるのか？その必要はあるのか？」(その他，多数質問)

(4) 総括

中間シンポジウムを通して，各教科の「見方・考え方」などの普遍性，固有性が確認された。最後に担当の鈴木から，最終シンポジウムに向けた次回からの教科別準備について「あなたの教科の見方・考え方を活かしたら，どんな授業になりますか？」「その授業は従来のものとどう違いますか？」という課題が提示され，授業の題材として「アサガオ」か「エネルギー」のどちらかを取り扱う条件が課された。



写真3 発表の様子



写真4 グループワークの様子
(守谷富士彦)

3. 第3部「最終シンポジウム」編

中間シンポジウムでは、各教科の「見方・考え方」について発表と議論を行った。それらを踏まえ、最終シンポジウムでは、各教科の目的の固有性と普遍性を踏まえた授業案を構想し発表した。その際、授業の題材として「アサガオ」か「エネルギー」のどちらかをとり扱った授業を構想することを発表の条件とした。

	日時	担当教科
第13講	2017年1月18日	美術科・英語科・社会科
第14講	2017年1月25日	数学科・理科・家庭科
第15講	2017年2月1日	音楽科・国語科

第9講～第12講は教科別の個別授業。最終シンポジウムでの発表に向けて準備を行った。

(1) 最終シンポジウムの発表テーマ

1. 各教科ならではの「見方・考え方」とは何か？
2. 「見方・考え方」を意図的に活用した授業実践とはどのようなものか？
3. 各教科の発表で理解できた○○科らしさとは何か？

(2) 講義の流れ

最終シンポジウムでは、講義の導入部で授業担当者の草原が、最終シンポジウムでの発表テーマを確認し、展開部で各教科の代表者がテーマについて10分程度で発表を行った(写真5)。終結部では「発表を通して明らかになった○○科らしさ」について、全体で意見交換を行い、草原が講義全体の議論を総括した。

(3) 具体的な講義内容

① 第13講：最終シンポジウム

教科	授業テーマ
美術科	「なぜアサガオは東京オリンピックロゴマークの候補になったのだろうか」
英語科	「“The Tunnel”を読む」
社会科	「なぜ江戸の人々はアサガオに夢中になったのだろうか」 「私たちの住む地域を元気にするために○○ブームを起こそう」

シンポジウムでは各教科の発表に対して、「発表を通して明らかになった〇〇科らしさ」について他教科の学生がコメントした。

美術科の発表を受けて、社会科の学生からは「ある対象“～のシンボル””として捉える点に美術科らしさがあるのではないか」という意見があった。英語科の発表を受けて、数学科の学生からは「英語という言語の文化理解に英語科らしさがあるのではないか」という意見があった。社会科の発表を受けて、英語科の学生からは「今の社会にも転移できる知識を習得することが社会科らしさではないか」という意見があった（写真6）。

② 第14講：最終シンポジウム

教科	授業テーマ
数学科	「一次不定法方程式：エネルギーを題材として」
理科	「電力計を用いた家庭用電気器具の電力量の測定」
家庭科	「これからの生活とエネルギー」

数学科の発表を受けて、社会科の学生からは「数学の世界への手がかりとして現実世界を用いる点に数学らしさがあるのではないか」という意見があった。理科の発表に対して、数学科の学生から「実験と実測を根拠とし考察することが理科らしさではないか」という意見があった。家庭科の発表に対して、「自己の生活をメタ認知し、自分の生活を再構成することが家庭からしさではないか」という意見があった。

③ 第15講：最終シンポジウム

教科	授業テーマ
音楽科	「音のもつエネルギー・音楽のもつエネルギー」
国語科	「エネルギーを題材とした説明的文章：筆者の認識に着目して」

第15講の最終シンポジウムでは、まず、担当の草原から「～科教育」と「～教育」の違いについて考えさせる導入があった。両者の違いについて、美術科の学生からは「～科教育は～自体が目的ではなく、～を通して目標を目指すのに対して、～教育は～自体が目的となる点に違いがあるのではないか」という意見があった。

次に、音楽科と国語科から発表があった。音楽科の発表に対して「“音”としてエネルギーを捉えようとした点」、国語科に対しては「“ことば”としてエネルギーを捉えようとした点」にその教科らしさがみられたのではないかと草原が総括した。

最後に、講義全体の小レポートを作成し、次semesterで開講予定の「教科教育学の実践的検証」の予告を担当の鈴木が行い、講義全体のまとめとした。

<小レポートテーマ>

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・自分の教科の特性や目的をどう理解しましたか。他の教科と比較して論じなさい。・今後あなたの教科は他教科とのどのような連携が考えられますか。具体例をあげなさい。 |
|--|



写真5 学生による発表



(河原亮亮)